

つこと、悪く解すればそんなの鼻持ちならぬエリート意識、弊害の方が大きかったといふことになるけれど、当時(昭和十年代初期)と雖も、全国高等学校の生徒みな、多かれ少なかれその気概は持つてゐたと思ふ。天下に名高い第一高等学校寮歌「嗚呼玉林に花受けて」の中にも、「一たび起たば何事か、人生の儼業ならざらん」の一節がある。未成年の高校生どもが酔つ払つて国士気取りで放歌高吟するのを、土地の警察は大体黙認してゐた。

花吹雪の下で母校の寮歌を思ひ出し、涙ぐんで帰つて来て、こんな感傷的な回想文を書き始めたのに、実はもう一つ別の原因があつて、久世光彦さんの急逝がかかはつてゐる。「諸君」五月号の「紳士と淑女」欄によ

れば、旧制高等学校のあつた時代に、彼は憧れを抱いてゐたさうだ。西田幾多郎の哲学書や倉田百三の戯曲を、「少年が耽読して教養の基礎とした昔を羨望した。過ぎ去つてもう戻らない時代だから、よけいそこへ戻りたがった」――。

久世さんと私とは、個人的に識る機会無く、著書や手紙の遣り取りだけに終つたので、心情の詳細を知らないが、作風より考へて、なるほどさもありしならんかと察しはつく。生れが七年早く、東大の美学へ進む前の彼にも旧制高校の生活体験があつたらと、ちもない想像をしてみる。東京山手育ちの久世光彦の志望校は、やはり一高だつたか。それともちよつとひねつて東高、浦和、静岡か。いづれにせよ出身高校の寮歌は、彼にとつて「臨終に過ぎし一生を振り返り、思い出してから死ぬ

歌。思い出すまでもなく耳の底から鳴ってくる歌」「紳士と淑女」、まさしく「マイ・ラス・ソング」であつたらう。杜甫の詩「人生七十古来稀ナリ」が古諺になつたこんにち、才豊かな作家の七十歳の死も惜しいが、昭和の敗戦で日本人が捨て去つた惜しむべきものの一つは、彼の憧れた旧制高等学校の教育制度だつたかも知れない。

ある知日派の死

中嶋嶺雄  
(国際教養大学学長)

去る三月上旬、マルタ大学との交流協定調印のため、地中海上のマルタ島を訪れた。帰路、乗り継ぎのためフランクフルトの空港ラウンジで過ごしてるとき、ハンガルの『月刊朝

鮮』(二〇〇六年三月号)が目にと留まつたので、なにげなくページを繰っていると、「関寛植(1918~2006)」となつていて、何枚かの関さんの写真も出ているではないか。

胸騒ぎを覚えて思い起こすと、昨年、秋田の国際教養大学が催した国際会議にご招待し、秋田とソウルの間には直行便がありませんから是非来てくださいと申し上げたのだが、そのままた話が途切れてしまつて、ずっと気懸かりになつていたのである。

関さんほどの方の訃報は、当然日本の新聞に掲載されていたものと帰国後に調べてみたがわからず、韓国・朝鮮問題を専門にしている私のゼミ出身者に問い合わせても、知らないと言ふ。だとすれば、何かの間違ひではないかと、思い切つて、韓国料理の専門家としても知ら

れる奥様(金英鎬女史)にお電話したところ、一月十六日朝、ベッドで亡くなつていたとのことであつた。八十八歳というのに、前日もテニスをやつていて、いかにも関先生らしい最期だつたと言われたが、私の電話には咽び泣いておられた。

それにしても日韓関係や韓国政治のうえからも重要な人物だつた関さんの訃報が紙面にほとんど出なかつたこと自体、急速に変わりつつある韓国の政情とあるいは記者諸君の不勉強を象徴しているのではないか。関寛植氏はかつて韓国の国会副議長・委員長代理、文教部長官(文相)などの要職を歴任した政治家で、独裁者と言われた朴正熙大統領にさへ諫言した人として知られてゐた。長く韓国の体育会会長も務めたスポーツマンで、わが国の青木半治・日本体

育協会最高顧問とも親しく、国際法学会の大長老であられた横田喜三郎博士ともテニス仲間の人、知る人ぞ知る知日家であつた。

私どもとの接点は関さんののも一つの側面を物語つていて、おそらく日韓関係や東アジアの国際政治関係で関さんを知らない人は少ないはずである。若き日に方応護奨学金を得て京都帝國大学農学部農芸化学科に学び、その学恩に感じて奨学財団重山育英会を設立、多くの奨学生を育てた。一時政界から退いて再び京都大学に來られ、猪木正道教授の指導を受けて法学博士の学位を取得している。次いで韓国の国際政治・国際関係分野の若手学者を育てるための亜細亞政策研究院を設立、門下生には駐米大使を務めた金瓊元氏、駐日大使になつた崔相龍氏らがいた。私が関さんに

初めてお会いしたのは、日本の中国研究の現状を知りたいと来日された、もう四十年近く前のことである。

それ以来、関さんは来日すると必ず電話を下さつたが、いつも六時前後の早朝なので、夜型の私には辛かつた。いつが大磯で「東アジア比較研究」のシンポジウムを開いたときには、早朝のテニスに誘われた。私は会議の責任者で前夜も遅かつたのに断りきれず、コートに出たのだが、関先生にはとてもかなわなかつたばかりか、準備運動もなしでお相手したため、右足が肉離れしてしまつた。その代償に私には上等すぎる立派なラケットをソウルから送つて来て下さり、今も愛用している。

関さんは、自宅に「関寛植博士物館」とも言うべき記念品のコレクションを、大きなトロフィーからクレジットカードに到るまで無数に展示して、来客を驚かせた。関さんは思ったことをそのまま強い調子で話す直言居士で、わが家にお招きした時も、ビールが冷えていないとお叱りを受けたことがあつた。そんな関さんがかつて東京外国語大学を訪れた際、当時は

表紙の言葉

〔高原の彩(長野)〕  
初夏を迎える高原の色は濃く、強い。冬から春の景色を描いた淡く柔かい日本画材では表現が難しい。この森の彩を描くに粒子の粗い岩絵具を使つた。油画の画材と変らぬ強い発色を期待して試みた。

緑育の森に純白の白樺林、そして燃えるような朱のレンゲツツジ。強烈な色彩の競演が初夏の彩だ。

平松 礼二

韓国(朝鮮)語の学科がなく、この点でも叱られて、私は朝鮮語学科の設立に奔走した。

その関さんには『在日韓国人の現状と未来』(白帝社、一九九四年)と題する著書がある。たまたま私が博士學位論文を指導した在日のKさんが関さんにインタビューしたいと申し入れると快く応じて頂き、學位取得を喜んで手紙まで下さったという。

最近ソウルのホテル新羅のヘルスクラブで毎日身体を鍛えられ、同ホテルのレインボウ・バーで上等の赤ワインを飲まれるのが日課のようだった。韓国の最近の政治についてはひどく幻滅されて怒っていたが、ホテルを辞去する私を抱きかかえて、「中嶋教授、身体にだけは気をつけなさい。身体が第一だ」と強く諭されたことが、忘れられない。

### 五十五歳の新入生

高橋源一郎 (作家)

去年の四月に、ある大学の先生になって、ようやく一年が過ぎた。

なにしろ、わからないことばかりだった。だいたい、ぼくは、大学を卒業していない。というか、授業にほとんど出ていない(おそらく、在籍していた八時間で五、六時間ではあるまいか)。なので、大学というところがなにをやる場所なのか、承知していない。

同僚の先生からいただいた「こんな感じで、おやりになれば」という簡単なアドヴァイスがすべてで、あとはもう、学生諸君にモルモット代わりになってもいい、講義という名の実験

の連続だったのである。とにかく、そんな試行錯誤の一年が終わり、大学にも慣れ、とまどうことも驚くことも、もうないだろう、と思っていたら、まだあったんですねえ、びっくりするようなことが。

今年、ぼくのゼミに、編入してきた学生がいる。社会人入試で入学したUさん(女性)だ。Uさんは、今年五十五歳。びっくりするではありませんか。ぼくと、同じ歳なのですよ!

子どもたちを育て上げたUさんは、その最後の仕上げとして、また社会復帰の第一歩として、以前卒業した大学を再度受験、見事合格、大学に戻ってきた(ちなみに、Uさんは、未婚と一緒に受験したそう)。Uさんの、最初の大学入学は一九六九年、東大入試がなかった年。全国の大学がいわゆる「学園紛争」でバリケード封鎖され

ていた、戦後もっとも「熱い季節」だ。もしかしたら、どこかの街頭で、ぼくはUさんとすれ違っているかもしれない。

さて、ぼくのゼミに、その五十五歳の新入生がやって来た。ぼくも五十五歳。残りの学生諸君は、みんな二十歳前後である。はつきりいって、ゼミをやっている、というより家族会議をやっているような気がする時がある。いやいや、ゼミの学生の多くの両親は、ぼくやUさんより若いのである。

ゼミにおける「Uさん効果」は素晴らしい。なにしろ、自分の母親ほどの(もしくはそれ以上の)歳の女性が、きっちりテキストを読んできて、熱心にノートをとり、真剣にディスカッションに加わる。負けてはいられない! その結果として、学生諸君の目の色が変わる。そこまでは予想できた。だが、予想

できなかったこともある。

一年生や二年生と話をすると(三年生や四年生でも、基本的には同じ)。なんについてでもかまわない。政治のことも、経済のことも、いま習っている授業のことも、いい。彼らの話は「断片的」だ。

「憲法についてどう思う?」「いいと思います」「いいが?」「九条は、平和を守るから」「では、自衛隊は、どうなるの?」「憲法と矛盾しています」「それでは……」

一つの質問に、一つの答え。それから先がない。だから、一々、関連質問を続けていかないと、話がつながらない。それは仕方ないことなのかもしれない。ぼくもまた、二十歳の頃は、知識や情報を受け入れるのに熱心でも、それがどんなつな

がりを持つているか、考える余裕などなかったのだ。Uさんは違う。簡単にいうなら、Uさんの話には「物語」がある。

### 顔

記憶にはなき父の顔 シャボン玉吹きつづけお孫と競いて風船の紐握りしめ眠りおり夢のしっぽをつかむ幼子のど自慢の鐘なら幾つ鳴るだろう叱りすぎたか甘やかしたかヤダ星からヤダ星人がやってきてヤダと言う子を連れてく話投稿歌にイナバウアーの語が増えてイチロー増えて今年の桜四月らしい感じと思う子の名前帽子に書いてゆくとときはりこみの刑事のように見上げおならし保育の子がいる窓を一生を見とどけられぬ寂しさに振り向きながらゆく虹の橋

俵万智

の子どもを産んだのは」と始まる。どんな「問題」も、きちんと、Uさんの「物語」の中に、場所を確保してあるのだ。三十年、「社会」を「経験」した

いまお仕事から

中村紘子

(ヒメニス)

もう十数年まえのことになるが、あるときテレビのドキュメンタリー番組に「オウム返し」という言葉があるように、通常オウムは人の言葉を真似して繰り返すことはできても会話はできないとされている。ところがこのオウムは、人の言葉を理解するばかりかそれに対応しておしゃべりすることができたのである。

# 文藝春秋

大正十一年一月三十日第三種郵便物認可  
平成十八年六月一日発行(毎月一回一日発行)  
第八十四巻第八号

衝撃予測 10年後の「団塊」  
新・昭和史七つの謎 保阪正康 六月号



文藝春秋  
衝撃予測  
10年後の「団塊」

6  
2006

大正十二年一月三十日第三種郵便物認可  
平成十八年六月一日発行(毎月一回一日発行)  
第八十四巻第八号

文藝春秋

(第八十四巻 第八号)

定価七二〇円 本体六七六円

## もんでほしいほどツライ、 目・肩・腰に。

忙しい毎日がつつくと、目・肩・腰がつらくて仕方がない。  
そんな経験、あなたはありますか。  
そこで、アリナミンEXプラス。フルスルチアミン(ビタミンB1誘導体)、  
ビタミンB6・B12、パントテン酸カルシウムなどを配合。有効成分が  
①内側から「届く」②じっくり「働く」③ツライ症状を「やわらげる」  
3つのステップで、よく効きます。



# アリナミン<sup>®</sup> EX PLUS



アリナミンEXプラス:目の疲れ・肩こり・腰の痛みに。ビタミンB<sub>6</sub>・B<sub>12</sub>・B<sub>1</sub>製剤、  
ビタミンE、パントテン酸カルシウム配合。成人(15歳以上)1日1回、1回2~3錠。  
目の疲れ・肩こり・腰の痛みに。医薬品

インターネットで、健康・ビタミン情報を公開中! [allnamin.jp](http://allnamin.jp)  
武田薬品工業株式会社 ヘルスケアカンパニー 〒103-8668 東京都中央区日本橋二丁目12番10号



プラス志向でいこう。



雑誌07701-6



4910077010665

00676